

教養についての会話

オットー・サロモン 著
横山悦生 訳

“同志よ、教育の旗のもとに立ち上がれ！祖国の村に集まろう！より高貴な感覚が北欧人の美德のために我々の活動を励ますように。もし暗闇と偏見が圧迫するなら、光に向かって精神を前進させよう。家庭の平和の防衛に、平和の防衛にわれわれ自身を高貴にしつつ。”

「とても美しい歌だった。船長、前甲板の下で歌っているのは誰ですか？」

「あの人たちはどこかの会合に参加して、マルメで乗船した民衆学校教師たちです」と船長は丁寧に答えた。

この親切な客船の船長のように、基本的な質問を受けて苦しめない人間は滅多にいない。事情が許せばページをめくることができる生き字引として、蒸気船の切符を買った一人一人が船長に質問する権利を獲得したように思われた。船長も教師も事情は同じようなものだ。彼らは回答可能かあるいは回答不能な質問に首尾よく対処するために必要な我慢をしなければならない。なぜならば、彼らはほとんどあらゆることを質問され答えることに準備しなくてはならないからである。

質問している人は一等船室の乗客に属していて、南部スウェーデンの豪華で快適な家具がついた快速蒸気船の艦橋にたまたま厚かましく座っている。その船は、南スウェーデンの対抗している都市であるランスクローナとヘルシンボリの間を航行している。気持ちのよい夏の午後で、空は高く紺青色で、あちこちに薄い縞模様の雲がはっきりと見えた。蒸気船が進むことによって生み出される風以外には風はほとんどなかった。海の表面の小さな波は船を揺らすことができなかった。東の方向にスコーネの入江が見えた。その入り江の先には森の木立やぼつんぼつんと立つ家屋や集落が見えた。澄んだ空気の中に教会の塔や工場の煙突が立っていて、しばしば驚くような大きさであった。西の方向には山の稜線の形とよく似ているシェラン島のブナ林がかすかに見えた。船尾の方向には切り立った海岸で、森のないヴェン島が海面によく映り、また眼に見える限りでは夕べの光りの中で白い帆が精一杯広がっている大小の帆船が緑色に輝く海水を切り、進んでゆくのがはるか彼方に見えていたのと同時に、長くところどころ太い煙の流れが蒸気船の進路を示していた。沈みゆく夕陽がデンマークの地の背後に隠れるまで、光をスウェーデンの地に投げかけている間は、そのような夕刻に心地よい雰囲気がある。人は座って物思いにふけ、自分の気持ちが落ち着くまで揺れている。たわいない会話は少し前まで容易に続けることができた。会話が途中で止まったり、会話がなくなる。その厳粛な沈黙がそこにいる人々に感じたり、想像したり、感動したりする。

そのようなことが今回も艦橋においても起った。夕食後に煙草やウィスキーを飲みながら、ちょっとした楽しい会話の時間を得る目的で艦橋に上った紳士たちは次第に話をやめるようになった。その時たまたま前甲板から歌が湧き起こり、その歌に心から耳を傾けた。それはすでにある雰囲気とよく調和したからであった。しかし、この雰囲気はストールナッケという騎兵大尉が強いスコーネ方言ですべての“アール(r)”を舌を丸めて発音しながら、船長に以下のように質問をすることによって中断した。

「そうなんですか。このカッコウ（民衆学校の先生）たちは、少し教養をもっている人物に期待されるよりももっと上手に歌っていますね。」

「そのとおり」と、中等学校の助教諭のボーリングがウィスキーグラスの液体を少し飲んだ後、うなずいた。「民衆学校の教師にしては歌うのはまあまあだと思います。しかし同じ歌を歌う学生たちの四重奏と比べると、その違いは相当に大きいことがすぐにわかるでしょう。この違いは、教員養成所（セミナリウム）で達成できる教養とアカデミックな教育で達成できる教養との違いに完全に比例しているように私には思えます。なぜならば、アカデミックな教育がそれに参加した人に付け加える特質は本当に素晴らしいからです。」

もう一人の同伴者であるヘデンクヴィストは、よく手入れされた金色の口髭をもった公証人で、隅々にわたってよく考えられた観光者のための服である、大きなチェックの灰色の布で作られた上着と半ズボン身を身につけており、入念にといた頭髮に小さな縁なし帽子を遊び心として被り、褐色にぬられた靴を両足

に履いており、自分で上手に巻いた煙草から煙を出して物憂げな声で口を開いた。

「民衆学校の教師たちが声の調子を合わせているのを聞くと、『同志よ、教養の旗のもとに立ち上がれ！』という歌は私には奇妙な印象を与えます。民衆学校の教師たちが教養の旗を放置できる（歌う必要がない）と私は考えます。なぜなら民衆学校の教師たちは教養の旗と特に共通点があるはずがないからです。大事な歌がそんなに見下されると、学術市民が実際に憤慨するはずです。ある人が教養があると言えるには、最低限の資格としては少なくともギムナジウム卒業試験に合格することです。」

騎兵大尉は肩をすくめ、この優雅な公証人に厳しい視線を向けて次のように言った。

「いや、私はこの意見に絶対賛成できない！私が若かった頃はギムナジウム卒業試験に合格しなくてもカールペリの軍人養成学校で勉強することができた。公証人さんは、私を教養人の中に入れてくれますよね。大学教育に関して言えば、私は郷里のマルメで《イギリスのサドル》と《ボムサドル》の違いすら知らないような教養がない哲学博士を知っている」。

その時、助教諭が以下のように口をはさんだ。「いま騎兵大尉さんが言い出したことは、教養のあるなしを判断する基準とまでは言えないのではないだろうか。まあ、もしその問題が正しく検討されるべきであるならば、もう少し深く究明すべきだ」。

「私は助教諭さんの意見に完全に賛成します」と、四人目に話し出した乗客は、知的でエネルギッシュな外観をした、その人柄は落ち着いていて調和的な印象を与える、中年くらいの保険会社社長であった。そのベリィヴァルがさらに「いま話題にしたことによって、我々が教養ある階級に属している理由を理解することができる。また、前甲板の下で歌っている人たちが中途半端な教養しか持っていない、あるいは教養のない階級に属するかを理解することができる。だから、教養が本来何によって成立するかを議論してみませんか。」と述べた。

「私には、その説明はそんなに難しくないんですよ。」と騎兵大尉が話に鋭く切り込み、「私が教養のある男性に当然第一に要求するのは、正しい振るまい方を知っていて、いろいろな人物と話ができることです。もし自分がソファーにドーンと座り、一緒にいる女性を立たせたままであったり、私が軽騎兵に話しかけると同じような仕方で、ここにいる紳士たちに話しかけるならば、それによって私は教養のない男であることを証明することになる。これがこの問題に関する私の見解です。」「おそらくその通りだとも言えるし、その通りだとも言えない。女性の例についてはだいたい同意できるのだが、軽騎兵の例については意見を保留したい。教養にはいろいろな要素があります。偉大な英国の風刺家サッカレイが『伊達男の本』で語らせていることは、教養がある英国の男性とそうでない英国の男性を一目で見分ける方法とは豆を食べる時にナイフを使うかどうかである。つまり、後者がナイフを使って豆を食べ、前者はナイフを使わない。しかし、騎兵大尉さんの一つの例に話を戻すと、もし騎兵大尉さんが逆の立場で、私たちと同じように軽騎兵を扱うならば、どうなりますか？」「私は絶対にそうは思わない。人と人とを区別することは必要であるからだ。」と述べた。

保険会社の社長が微笑みながら、「まあ、私たちはいま教養についての騎兵大尉さんの意見のある程度理解しました。公証人さんの意見も聞かせていただければ面白いのですが」と言った。

そのように質問された公証人は、考えながら指で金髪の鬚を巻きながらかなり間をおいてから、

「もちろん私は騎兵大尉さんと同じ意見を持っています。つまり話しかける方法や態度について、言葉を変えるならば振舞い方について、教養をもった人に対してある要求を立てることができなくてはならない。人との接し方において教養をもった人間を特徴づける、名状しがたい、ある何かがある。例えば……」と答えると、保険会社の社長が「例えば」と意味ありげな横目を使って「正しい場所に正しい悪口を差し込むことを教養をもった人が理解するような方法で」と言葉を続けた。すると、騎兵大尉は「いや、保険会社の社長さんが言ったことは私は考えもしなかった。しかし、自分が本来言いたかったことに戻るために、ある人が教養をもっていると呼ばれるためには博識と読解力をもっていなければならないと私には思えます。」と述べた。

「騎兵大尉さんが教養をもった人は《イギリスのサドル》と《ボムサドル》を区別できるべきであり、また我々は今船に乗っているのだから、船についての違いは船長が確かに私を助けてくれるだろうと考えていることを公証人さんが言いたいのではないですか。」と助教諭がいうと、「船に使うロープのいろんな結び方《eselhuvud》と《apgaffel》の違いや、さらにはロープの種類である《nockslabbgårdningar》と《brambarduner》の違いについて話しましょう。」と船長が言った。

「そうですね。でも、それは知識と呼ぶのでしょうか？」

「そうですよ。でも正直に言えば自分の考えたことではない。当然ながら私が知識と呼ぶのは、歴史や言語や自然科学や文学等のような一般教養的な性質をもっているものであると私は言いたい。」

「それは拝聴に値しますね。しかし公証人さんは、前甲板にいる教養のない教師たちも前述の一般的な知識を全然知らないわけではないということを考えに含んでいますよね。」

「まあそうだろうね。だが、それらの教科についてあの人たちの知識の程度と範囲はそれほどたいしたものではない。何かと比べると。」(そのように公証人が言いかけると)

「公証人さんが学んできたことと比較すればでしょう。まあ、そうですね。この世のすべてのものは相対的なものです。公証人さんの教養を過小評価したくありませんが、ここで示された分野で公証人さんよりもより多くより深い知識を持つ人がいることを私はあえて考えます。こうした教養ある人々と比べて、公証人さんは自分を無教養だとか、教養が足りないとか、または彼らの8分の5しか教養がないと見なしますか？」

「もちろん」と助教諭が口をはさみ、「ここで示唆された知識で、公証人さんや自分よりたくさん知識を持っている人がいます。私が思うに、知識が教養にあたえる影響に関しては、どのようにそれらの知識が獲得されたのか、いわばそれらの知識が意識の中へどのように取り入れたかということに留意すべきです。セミナーを卒業するための試験に合格するためには、本来、ある宿題をただらと学習すること以上のことは求められません。獲得された知識は自ら自主的に考えたものではありません。セミナーの生徒は、勉強していません。彼らは『先生の言葉を信頼する』ところから先には行きません。」

「それに対して、公証人さんが先ほど教養を持っているということの証拠として特徴づけた、いわゆる大学入学資格試験に合格するために多くの年月をかけて準備する際に宿題を学習することや先生や教科書を無批判的に信頼することは生じないのでしょうか。」と、保険会社の社長がひょうきんな態度で続けた。

「ふむふむ。このベテランの中等学校の先生のように、私はこの異議が完全に正しいとしよう。しかし、私は特にアカデミックな学問を考えていました。それらの学習では、セミナーでの学習のように宿題や分厚い教科書を勉強することはありません。」

「そうですか？そうではないのでは？大学生たちは一定の教科書から宿題を暗記する。先生のために宿題を読み上げる。また、大学で使う教科書は少なくとも最初の大学の試験のための準備にはならないでしょう？ここにいる大学の教育を受けたみなさんは、これらの軽率な質問に微笑むことなしに互いに見つめ合うことができるのでしょうか？」

「いいえ、本当のことを言えば、私たちは微笑むことはできます。私は科学的な意味における学習は本来はより上級の試験に合格する時にこそなされるということや、自然科学の分野では上級の試験を受ける以前にも可能であることを認めなければなりません。」

その時に公証人が話に割り込んで、

「しかし状況がそうであるとしても、ここからセミナーの教育と大学の教育を比較可能であるという性急で完全に間違った結論を導いてはならないと思います。セミナーの生徒が与えられた教育を無批判に受け入れ、他者の考えや他者の意見や偏見を生活の中で使うのに対して、大学で学んでいる若者にはまったく違った成熟さがあり、先生や教科書から自分自身が自由であり、自分自身の意見を形成するというまったく異なる前提があると思います。たとえ多くの学生が厳密に科学的な仕事に従事する機会がないとしても、彼らは科学的な方法を学んできたのであり、このことはセミナーが提供するところの、魂を失った、消化することができない暗記とは別物です。私は民衆学校教師に対して大きな尊敬を抱くことができますが、彼らを私と同じ教養のレベルにあるとみなす必要はないと考えています。両者にはまったく明瞭な違いがあるように私には思えます。すなわちスウェーデンのセミナーの以前の生徒たちには、自らの知識と立場への信じがたい尊大さと自己満足があります。」

ベリヴァル社長が椅子から立ち上がり、テーブルの周囲を回って若い公証人の隣に立って、親しそうに肩を叩いた。

「以前のアカデミックな市民は自己批判の程度の高さですぐに特徴づけられますが、それによって自分の知識の範囲と深さを理解することができ、彼ら自身に自らの知識が計り知れない大海に対する小さな雫にしかならないことを認識させ、承認させるところの賛美に値するその謙虚さがその特徴でした。セミナーの教養とアカデミックな教養の差は実際にはとても明白です。しかし、私たちは教養のある人間の

持つべき知識の種類について語ることからまったく離れてしまいました。この問題に戻りましょう。」

「私の考えでは、先ほど述べたようにとりわけ教養のある人間として自分をみなしたい人にはある言語の知識が要求されなければならないという意見を持っています。この点で私たちは民衆学校教員よりももっと教養があると私は考えます」と公証人は述べた。

ストールナツケ大尉は軽蔑するように両肩をあげて、グラスを空にして強く音を立てて置いた。しかし、何も言わなかった。それに対して、常に上手に意見をまとめる保険会社の社長がいらいらした表情を眼に浮かべながら質問した。

「ではどのような外国語を教育のある人が身につけなければならないと公証人さんは考えているのですか？」

「はい、第一に古典語であるラテン語とギリシャ語です。なぜなら、テグネールが以下のように言うとき、それは正しいと思うからです。」

「すべての教養は最後まで不自由な基礎の上に立つ。かつて祖国の野蛮さしかなかった。」

「いや、公証人さんは少なくともこの点で私を味方にしていません。」と助教諭が強く言い切り、「私はラテン語もギリシア語も確かに必要な教養の手段とは考えません。逆に私はこれらの死んだ言語が無用で重くのしかかった古めかしい重荷であり、初めからこういう重荷からはわれわれを解放するように努力すべきものです。」と述べた。

「のしかかった重荷だって！それなら、ラテン語教育を受けたことのない人に本当の意味での教養について実際に語るができるのでしょうか？」

「古典語が唯一の教養でないならば、それは残念です。というのは、その場合スウェーデンで教養ある女性は数百人もいません」と保険会社の社長が言った。

「女性の問題は別です。彼女たちの教養の理念は我々のものとは異なるものとして設定されるべきです。しかし、我々男性にとって古代の文献は、そこから汲み取ることを怠ってはならないところの重要な教養の源泉です。」

「公証人さん自身はとくに熱心に古典から汲み取るのでしょうか？」と助教諭は公証人をあざけりながら質問した。「おそらく公証人さんは、ヴェルギリウスやホラティウス、さらにプラトンとアリストテレスの原典を旅行カバンにいれているのでしょうかね。」

「いや、私はそんなことを言いたいのではありません。正直に言えば、そうした本を読む時間がないことを認めなければなりません。自分は他にもっと違った関心を持っています。古典語に関しては、法律家はこの言語から借用された多くの術語をきちんと扱えるようにラテン語にはある程度習熟していなければなりません。paktum(契約), fatalier (猶予期間), serivitut(懲役刑), resolution(判決), reconvention(反訴), renovation(更新), preskription(時効) 等々の言葉を正しく理解するためには、しかるべきラテン語の知識を必要とします。教養のある法律家は、ローマ法がもともと書かれた言語であるラテン語をどうにか読めるに違いないと思います。そのことは実際のところ誰も反論することができないでしょう。」

「実践的な理由によって”notarius publicus(公証人)”という表現を正しく使用することができるために、法律家はラテン語を学んでいなければならないとするならば、鉄道の職員にも同じ要求をするべきで、鉄道員は lokomotiv(蒸気機関車)が何を意味するのかを完全に理解できるように、さらに彼は semafor(腕木信号機)という言葉を理解するためにギリシア語を学び終えているべきであると私には思えます。それなら農民は古典語を学んでいるはずでしょう。なぜならば、そうでなければ蒸気自動車(lokomobil)や抵当権設定証明書(gravationsbevis)のような言葉を彼は理解できないでしょう。おそらく公証人さんは可愛い電話交換手がある装置を使って仕事をするのを許されるまでに、ギリシア語の文法の試験を受けることをお望みでしょうね。その装置の名称は古代ギリシアの造形的な美しい言語が由来ですから。」

保険会社の社長はふたたび折りたたみ椅子に座った。

「まだそんな話を続けているのかね。」とその社長は切り出し、「だから死んだ言語の話はやめて、現在使われている言語について話そうではありませんか。それで公証人さんは、教養ある人間はどちらの言語に精通し、あるいは少なくとも学んでおく必要があるとお考えでしょうか？残念ながら、精通するということがと学んでおくということは完全に同じことではありませんが。」

「まったく当然なことです。私は教養ある人間には三つの最も重要な言語である英語、ドイツ語、フランス語の知識を要求します。その人物がそれらの言語による文献に関する知見をまず吸収することがで

きるように。」

「その理由は一見賛成できそうですが、詳細に検討すればあまり説得力ある意見とは思えません。しかし、私は公証人さん自身がその意見を信じていて、学校時代に自分自身がこれらの言語（英語、ドイツ語、フランス語）を学んできたとか、それゆえこれらの言語が教養の範囲に入るということについて自信があるのでそれらの言語をあげたのではないと思います。私にもう一つ質問させてください。公証人さんは自分のことをおおよそ教養ある《スウェーデン人》と考えていますか？」

「確かに私はそう考えています。しかしある国民について当てはまることは他の国民にもおおよそ当てはまるでしょうね。」

「そんなことはありません。私は自分の立場から何よりも決定的に反論せねばなりません。なぜなら公証人さんは、自分の母国語以外に精通していない英国人やフランス人の教養をあえて否定しないでしょうから。さらに私は教養あるスウェーデン人に例えばロシア語やイタリア語の知識がなぜ要求されないのかについて聞くことにとっても興味があります。トルストイやツルゲーネフやドストエフスキーとか、ダンテやペトラルカやトルクァート・タッソが書いた言語が陶冶手段として何らかの意味があるのではないのでしょうか？」

「確かにそうかもしれません。しかし価値のある文学を持つあらゆる可能な言語の知識を教養に含めることを合理的に要求することはできないでしょう。すべてのことには程度の問題がある。それゆえオリジナルの言語で理解できない作品の場合は、翻訳で満足するべきです。」

「では、現在使われている言語についてこれまで私たちが到達した結果を確認しませんか。」と保険会社の社長が述べて「公証人さんと私は、実際に読むかどうかは別として、英語でシェイクスピアを読み、ドイツ語でゲーテを読み、フランス語でルソーを読めるので、私たちにはおそらく教養があります。前甲板にいる我々の友人たちはそういう時に翻訳を使わねばならないので、教養のない者とみなします。トルストイとダンテについても同様です。しかし、私たちと彼らの差はわずかで恣意的だということを認めましょう。私にはこの差が種類の差というよりは程度の差であるように思われます。しかし、公証人さんは言語とは異なる陶冶手段についても述べました。私たちはこれからそのテーマに変えませんか？」

この会話をしばらく注意深く聞いていた船長はテーブルに近づいた。騎兵大尉は船長に着席してグラスの酒を飲むように誘った。そこで船長は愛想よく率直に答えた。「私は心から感謝します。しかし今は乗客からのお誘いを断ることは私の信条です。しかし、もし許されるならば、みなさんが生き生きと議論し、なおかつまだ議論する余地がある問題について、私の単純な理解をお話ししたいです。もし何かあるとすれば、教養についてどのように正しく理解すべきか、それは解決するのが困難な、特別に複雑な問題であるので、私の意見を述べたいです。人間の教養の程度を実際の知識、あるいは推測される知識によって判断することはあまり正しくないと思います。なぜならば、先ほど言語の知識に関して話されたことは、いわゆるほとんどすべての知識の領域について当てはまるからです。詳しく検討するためにどのような知識の領域を取り上げても、例えば歴史、地理、自然科学、数学、文学、製図、絵画、音楽のどれを取り上げても、どの程度これらの知識の領域を教養に必要性をもって含めることができるのかについて、常にためらいが生じるにちがいません。一人一人がこれらの問題を自分の個人的な観点、つまり自分自身が学んだことや、または自分自身ができると考えていることの観点から決めることがよくあります。しかし、その場合学校やギムナシウムや大学にいつの間にか獲得した知識とは異なる知識や、本を通して伝えられた知識とは異なる知識が教養としての性質をもっていることを人は多くの場合まるで忘れてるように思われます。生活それ自体、私たちの経験、私たちの観察、私たちの成功、私たちの失敗、私たちの苦労は、確かにいわゆる教科と同じような教養的な意味をもつ知識の源泉です。本を読んでいない人がたとえその人が獲得した知識が書物による知識と同じような高い地位のものではないとしても必ずしも無知な人間ではありません。皆さん、なぜかと言うとそれは全く単純なことです。ある人たちが自分で勝手に獲得した権利をもって他の人たちに成績を与え、その際に誰かを教養のある人として、他の人たちを半分だけ教養のある人として、残りの人たちを教養のない人としてレッテルを貼り、彼ら自身が学んできたことを根拠に自分自身を教養がある人であることを自明のこととするような、疑問の余地がある仮定から出発しています。どんな権利でこれをやれるのか、どんな権利で実際の科学者あるいは自分を科学者と思い込んでいる人たちが教養とは何かということに彼らが多かれ少なかれ従事しているテーマにあえて制限しようとするのかを私は知りたい。すなわち私にとって教養が相対的なものであることは明白であり、私たちの

教養の程度は私たちがなにができるかということよりも、私たちがなにであるかということによります。もし海水から食塩を製造したいならば、太陽熱の作用が水を気化させ蒸発させるようなところへ海水を導くと、水分が蒸発した後に食塩が残る。知識と教養との関係についても同じことがいえます。知識は教養のための手段です。知識は教養ではありません。教養はおそらく知識が蒸発した時に現れます。教養というのは、私たちが学校で学んだことをすべて忘れた後に残っているものです。この意味において真実は表面的には逆説的なそうした主張にあります。しかし私はそのようなたとえ話をさらに続けたい。人間にとってとても重要な食塩が大きく堅い山の地層から掘り出されるのと同様に、知識の水が精神に導かれる必要があるわけではありません。私たちの実際の、思い込んだ知識とはほとんど関係がないところの精神的な教養というものが少なくとも存在すると私は思います。それはほとんど変わらない何かです。それに対して、知識に基づく教養は時代や民族によって異なると私は思います。現代における教養の理想は1600年代のものとは異なります。教養のあるスウェーデン人への要求は教養のあるフランス人への要求と部分的に異なります。私は多くの年月を客船とともに過ごしてきました。最初は航海士として、その後は船長として。私は最初のころは、教養がある人、半分しか教養がない人、教養がない人というグループを三つの階級といかに一致させていたかをよく覚えています。しかし、事実はそうではなくて、逆に上流階級のレストランでは野蛮さが主流であって、一方、本当の精神の崇高さや本当の精神の教養は前甲板の人々に見いだされることを時の経過とともに私は学びました。私たちが教養と呼ぶものの多くが単なるうわべの飾りであり、容易にはげ落ちるものであり、内側に脆さを示しており、粗い、磨かれていない表面がしばしば心の高貴さに陰をさすものであることが次第に私には明らかになってきました。なぜならば、このことこそが私がいいたいことですが、人間の教養は本来人間の精神が形成される理念以外の何物でもありません。その理念が神の理念に近づくほど人間はより高い教養の水準に到達します。しかし教養の水準があがっていくためには、人間が自覚的あるいは無自覚的に引きずっている偏見の重荷を投げ捨てることのできる十分な謙虚さと十分な力がなによりも要求されます。教養がある人間の正しい意味を私はあえて決めるつもりはありませんが、教養がある人間というものは、他の人を教養がない人間であるとか、半分しか教養がない人間であるかを指摘することはしないと私は思います。しかしわたしはここで話を中断しなければいけません。まもなくヘルシングボリ港に接岸しますから。」

この立派な船はいま波止場への入り口を通過して曲がるためにゆっくりとした速度で進んでいった。乗客はきらめく夕方の光のなかに街の美しい近代的なスタイルの建物やそのまっすぐな街路や葉のよく茂った散歩道を見た。過ぎ去った時代の考え方や理想の記憶の残影の象徴として、スウェーデンのシェルネン城とデンマークのクロンボー城が現れた。まさに船が接岸地点に滑りこんで行った時、前甲板から民衆学校の教師の歌の最後のフレーズの声が聞こえてきた。

仲間よ、声を合わせて互いに励まし、生きていきましょう。
必ず勝利する、もっとも高貴な闘いのために準備をしましょう。
人がどのように判断しようが、われらはこう考えます。
人々の中での奉仕する神よ、われらに力と祝福を与えよ。

(1898年)